

『釋譜詳節第十二』新釈
— 『法華經』「序品」原文と対照して —

序

矢野謙一

この研究は『釋譜詳節第十三』を原文と諺解と対照し、解読する試みである。「序品」の諺解を対象とする。

『釋譜詳節』は李朝の世宗が昭憲王后の追薦のため首陽君に命じ作らせた書物である。出版年は一四四七年と推定されている。訓民正音の発布はその前年である。本の形式は後の諺解本とは異なる。翻訳文すなわち諺解のみで原文がない。訓民正音発布直後の本はいずれも諺解本の形となっておらず、この本も初期の試みの一つで、諺解本の形式に定まる前の形をとっている。現代の視点から見ると、翻訳文だけであるので今の翻訳本と同じである。現存する巻は、三、六、九、十三、十九、二十三、二十四といわれる。^{註一}

本研究はこのうち第十三を対象とする。この巻の原典は『法華經』の「序品」と「方便品」で、『法華經』の最初の部分である。このため途中からの解釈を避けうる。第十三は經の翻訳と本文に入れられた注で構成されている。本文は三十七張二行目までが「序品」、三行目から巻の終りまでが「方便品」である。「序品」の部分は抄訳で、本文や偈など適当に省いて訳している。「方便品」は編訳で、原文を省き順序を入れ替えて編集し、訳している。

本研究は現代朝鮮語の理解を基に、原文と諺解を対照しながら十五世紀の朝鮮語を解釈する。この方法は敗戦前に日本人研究者が主にとったやり方である。^{註二} 諺解は漢文の翻訳であり、訳文を解明の対象とするなら、まず原

文の内容を把握し、原文と翻訳文を対照し、解釈するのは合理的であろう。本論では原文を逐一あげ対照させている。

解釈にあたり最も問題となったのは文の切れ目である。ここでは漢文の文の切れ目をとり、翻訳文で形態的に反映していたら文の切れ目ととらえた。結果的に新しい観点から終結語尾をとらえたことになる。これにより冗長ととらえられていた文章が、^{注三}短文集合となり解釈がより明確となる。

以下、『釋譜詳節第十三』の「序品」の訳に相当する部分を『法華経』の原文をあげ、次に諺解を分ち書きして示す。分ち書きは文節の単位で分けている。諺解の原注は()で囲んだ部分である。傍点はすべて省略した。語の注釈などは必要と思うものを入れた。意味は漢字の意を主に採り、現代語からの類推は避けた。経文の横の実線は、諺解で省かれたことを示す。仏教用語は専門用語辞典にまかせ解説していない。語の注釈にせえられた「三章あ」等の記号は前間(一九二四)の解説の位置を示す。適切な初級文法書がないので、前間の解説を指示し、解釈の参考とした。なお、和訳は十五世紀朝鮮語の解釈であり、『法華経』「序品」を訳そうとしたものではない。

注解

如是我聞 一時佛住王舍城耆闍崛山中 與大比丘衆萬二千人俱

부데 王舍城耆闍崛山中에 겨사 (이)브데 法華經 니르시□ 靈山會라) 골근 比丘衆一萬二千 사□과
□□ 잇더시니 (이)□ 부뎃 나히 닐흔 □나히러시니 穆王 마□ 다□찾□ 甲子一라)

仏が王舍城の耆闍崛山におりたまひ(これより法華経を説きたまふ靈山会である。)大勢の比丘衆一万二千人といっしょにおられた。(この時、仏の年が七十一であられた。穆王四十五番目の年甲子である。)

부뎃名)仏。겨사[動]いらっしやる、게시다。브데[助]より、から。니르다[他]説く。골다[形](体積が)大きい。□□副]いっしょに。잇다[動]いる、ある、있다。□名]とき。닐名]年齢。닐흔[数]七十。□닐[数]一。마□[数]

四十。차[接辞]次、番目。□[名]年。

부터、부터の主格形、主格助詞は三章あ。에 与格と位格を表す助詞、母音調和は一章い、この助詞については二章え。거시다の活用は四章お、尊敬のしは一章う。□(語尾) 動詞の連体形語尾。動作が進行していることを表す。陽母音に用いる。陰母音のときはㄷとされる。이라、体言の後にきて単純な叙述を表す。指定詞이のあらわれる条件は主格助詞と同じ。은(語尾) 形容詞の連体形語尾。状態を表す。陰母音につく。陽母音には□。과(助詞) 具格助詞、と。字面はㄹ以外の子音の後に使う。それ以外は와。더시니、다過去去し尊敬の補助語幹。ㄹは終結語尾、文が終結するときは、時の補助語幹+ㄹとなる。□は一一三章あ。ㅏ(助詞) 属格を表す。尊敬の意を含んでいる。이러시니、指定詞のとき過去다は러になる。くであられた。

皆是阿羅漢

다 阿羅漢이라

みな阿羅漢である。

諸漏已盡 無復煩惱 速得已利盡諸有結 心得自在

諸漏一 □마 다아(漏一 세 가지니 欲漏는 欲界잇 一切煩惱一오 有漏는 色界 無色界잇 一切煩惱一오 無明漏는 三界잇 無明이라) □외야 煩惱一 업서 己利□ 得□야 (己利□ 제 모미 도□ 씨니 智慧□ 아라 疑心□ 그칠 씨라) 들릿 結이 다아 업서 □□미 自得□니라

諸々の漏が既に尽き(漏が三種で、欲漏は欲界での一切の煩惱であり、有漏は色界と無色界での一切の煩惱であり、無明漏は三界における無明である。) もはや煩惱がなく、己利を得て(己利は自身が善いことで、智慧を知り、迷いを止めることである。) 諸々の結縛が尽きて無く、心が自ら悟った人であった。

□마[副]既に。다□다[自]盡く。세[数]三の連体形、三。잇[助]での、における。もともと잇でiの後でjがあらわれる。□외야[副]もはや、復。제[代]自分の。도□다[形]善い。□[名]こと。ㄹの後で濃音になっている。□+이니で・が脱落した形。그치다[他]止める、とめる。自動詞はㄹ다、二章し。들릿[連]諸々の。

다아、八四章いを参照。ㄴ助は。□は陽母音につく。□助を。陰母音には≡。ㄹ接続語幹に直接つくると文は終らず続く。ㄴ러니は、完了の連体形語尾「+形式名詞イ+終結語尾이러니で、した者であった。

其名曰 阿若憍陳如 摩訶迦葉 優樓頻螺迦葉 伽耶迦葉 那提迦葉 舍利弗 大目犍連 摩訶迦施延 阿菟

樓駄 劫賓那 憍梵波提 離婆多 畢陵伽婆蹉 薄拘羅 摩訶拘絺羅 難陀 孫陀羅難陀 富樓那彌多羅尼子

須菩提 阿難 羅口羅 如是衆所知識大阿羅漢等 復有學無學二千人 摩訶波闍波提比丘尼 與眷屬六千人俱

羅口羅母耶輸陀羅比丘尼 亦與眷屬俱 菩薩摩訶薩八萬人 皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉 皆得陀羅尼樂說辯

才 轉不退轉法輪 供養無量百千諸佛 於諸佛所殖衆徳本 常爲諸佛之所稱歎 以慈修身善入佛慧 通達大智到

於彼岸 名稱普聞無量世界 能度無數百千衆生

그 일후미 阿若憍陳如와 摩訶迦葉과 優樓頻螺迦葉과 伽耶迦葉과 那提迦葉과 (伽耶迦葉과 那提迦

葉과 優樓頻螺迦葉의 아이라) 舍利弗와 大目犍連과 摩訶迦施延과 阿菟樓駄와 (阿菟樓駄와 阿那律

이니 阿菟樓頭이라도 □□니라) 劫□那와 憍梵波提와 離婆多와 畢陵伽婆蹉와 薄拘羅와 摩訶拘絺羅

와 難陀와 孫陀羅難陀와 富樓那彌多羅尼子와 須菩提와 阿難과 羅口羅와 이라트□ 모다 아는 大阿

羅漢□히며 (大迦葉은 頭陀第一이오 舍利弗은 智慧第一이오 目犍連은 神通第一이오 迦施延은 論議第

一이오 阿那律은 天眼第一이오 富樓那□ 說法第一이오 須菩提□ 解空第一이오 阿難□ 多聞第一이오

離婆多□ 持律第一이오 羅睺羅□ 密行第一이니 이 十大弟子이라 解空□ 空□ 알 씨오 持律은

律을 디닐 씨오 密行□ 秘密□ □더기라) □ 學無學二千 사□과 (學□ □홀 씨라 無學□ 다

아라 더 □홀 이리 업슬 씨니 學無學□ 當時로 온 다 아라 無學손□ □호□ 사□미라) 摩訶

波闍波提比丘尼 眷屬六千 사□ □러 와 거시며 (摩訶波闍波提□ 大愛道이라 □는 마리라) 羅口羅

□ 어마남 耶輸陀羅比丘尼 □ 眷屬 □러 와 거시며 菩薩摩訶薩八萬 사□미 (摩訶□ 클 씨니 菩

薩摩訶薩□ 菩薩人 中에 큰 菩薩이시니라) 다 阿耨多羅三藐三菩提에 으르디 아니 □사 다 陀羅

尼와 樂說辯才□ 得□사 으르디 아니 □ 法輪을 그우리사 (그우리사□ □도 조차 어딜에 □시니

이 □ 百千衆生 □ 아 □ 시고 □ 알 외 시는 德이라 法이 □ 고대 잇디 아니 □ 야 너비 피야 가
 미 술워 □ 그우 □ □ 法輪이라 □ □ 니라) 無量百千諸佛을 供養 □ □ 여러 부터 □ 한 德入
 根源을 시므사 □ 네 諸佛이 일 □ 라 讚嘆 □ 시며 慈悲心 □ 로 몸 닷가 부터 智慧에 잘 드르사 큰
 智慧 通達 □ 사 (通達 □ □ □ 씨라) 녀녁 □ 걸나 가사 일 후미 너비 들여 無量世界에 無數 □
 百千衆生 □ 잘 濟度 □ 시 □ 분내러 시니

その名が阿若憍陳如と摩訶迦葉と優樓頻羅迦葉と伽耶迦葉と那提迦葉と(伽耶迦葉と那提迦葉とは優樓頻羅迦葉の弟である。)舍利弗と大目犍連と摩訶迦旃延と阿菟樓駄と(阿菟樓駄は阿那律であり、阿菟樓頭ともいのである。)劫賔那と憍梵波提と離婆多と畢陵伽婆蹉と薄拘羅と摩訶拘絺羅と難陀と孫陀羅難陀と富樓那彌多羅尼子と須菩提と阿難と羅睺羅と、このようなみな知る大阿羅漢たちであり(大迦葉は頭陀第一で、舍利弗は智慧第一で、目犍連は神通第一で、迦旃延は論議第一で、阿那律は天眼第一で、富樓那は說法第一で、須菩提は解空第一で、阿難は多聞第一で、離婆多是持律第一で、羅睺羅は密行第一であり、これが十大弟子である。解空は空を知ることであり、持律は律をたもつことであり、密行は奥深い修行である。)さらに学無学二千人と(学は学ぶことである。無学は全て知りもう学ぶことがないことであり、学無学はその時、全ては知ることができず、無学のところで学んでいる人である。)摩訶波闍波提比丘尼が眷屬六千人を連れて来ておられ(摩訶波闍波提は大愛道という語である。)羅睺羅のお母様耶輸陀羅比丘尼も同様に眷屬を連れて来ておられ、菩薩摩訶薩八万人が(摩訶は大いという)ことで、菩薩摩訶薩は菩薩のなかで、大きな菩薩であらせられる方である。)みな阿耨多羅三藐三菩提からお退りぞきになられず、みな陀羅尼と樂説弁才を得られ、退ぞかない法輪を転がしたまい(転がしたまうことは、他人も従い、善良にさせ、これを起こす自己をお知りになり、他人に知らしめたまう徳である。法が一ヶ所にいることなく、広くのびてゆくことが車輪が転ぶようなので法輪というのである。)無量の百千諸仏を供養したてまつりて、諸々の仏に多くの徳の根源を植えたまいて、常に諸々の仏が称嘆し、讚嘆なされ、慈悲心で身を修め、仏の智慧によく入りたまい、偉大な智慧に通達なされ(通達は深く通じることである。)彼岸

に渡つてゆかれ、名前が広く聞こえ、無量世界で無数の百千衆生をよく濟度したまう方々であられた。

○名名、一六章あ。○助属格を表す。□리라、□+이+라、□は連体形語尾現在。□키助
 複数を表す。알다他悟る、わかる。○の重複で一方が脱落する。□다他保つ。□크名行い、修行。이러듯
 □連語かくのごとき、このような。이렇듯□+다。모다副みな。몰다自集まる。미호다他集める。노語
 尾連体形現在。ここでは意図法の解釈をとる。□副また、さらに。□호다他学ぶ。當時副その時に。손□
 □助に、くのもとで。□리다他ともなう、連れる。□助属格をあらわす。陽母音につく。어마노名お母さま。
 ○리다動退く、ひきさがる。○は連体形語尾未了。○は後の子音が濃音化することを表わす。□우리다他転す。
 自動詞は구을다、삼하는、四章おくか。□名他人。꽃다動随う。어딜다形善良だ、素直だ。에 □、今の
 하다、「は○とーの後で省略される。四章え。자개名自己。알외다他知らせる、わからせる。十三章き。□
 □數□날の連体形。□名ところ。너비副広く、あまねく。퍼어가다自伸びてゆく。승위□名車輪。□□□□
 ーに連用形語尾아がついた形、語のへは母音の間で△、△は母音の間で△となる。謙讓をあらわす。五章う。□
 □助、与格助詞で尊敬の意を含む。하다形多い。二章け。□네副常に。일□다(二変)一他称嘆する。二九章あ。
 닷□다他(身を)修める、整える。틀다自入る。□□□自隔々まで知る。뒤로連彼の、あの。느크名方、方向。
 □名、もとの形は□、岸、へり。五章あ、へは母音の間で△となった形。애로助位格をあらわす。二章え。건다
 □他渡る。틀어다自聞こえる。분내러시니、분名かた、내接尾複数を表わす。尊敬の補助語幹は時の補助
 語幹の後に来る。전名とき。와/과는羅列した最後の語にもつく。濟度□시□の□は行為を行うことに注目し
 て体言を修飾する。

- 其名曰 文殊師利菩薩 觀世音菩薩 得大勢菩薩 常精進菩薩 不休息菩薩 寶掌菩薩 藥王菩薩 勇施菩薩
 寶月菩薩 月光菩薩 滿月菩薩 大力菩薩 無量力菩薩 越三界菩薩 跋陀婆羅菩薩 彌勒菩薩 寶積菩薩
 導師菩薩 如是等菩薩摩訶薩八萬人俱 爾時釋提桓因 與其眷屬二萬天子俱 復有名月天子 普香天子 寶光天
 子 四大天王 與其眷屬萬天子俱 自在天子 大自在天子 與其眷屬三萬天子俱 娑婆世界主梵天王 尸棄大梵

光明大梵等 與其眷屬二千天子俱 有八龍王 難陀龍王 跋難陀龍王 娑伽羅龍王 和脩吉龍王 德叉迦龍王
 阿那婆達多龍王 摩那斯龍王 優鉢羅龍王等 各與若干百千眷屬俱 有四緊那羅王 法緊那羅王 妙法緊那羅王
 大法緊那羅王 持法緊那羅王 各與若干百千眷屬俱 有四乾闥婆王 樂乾闥婆王 樂音乾闥婆王 美乾闥婆王
 美音乾闥婆王 各與若干百千眷屬俱 有四阿脩羅王 娑稚阿脩羅王 佉羅騫馱阿脩羅王 毘摩質多羅阿脩羅王
 羅口阿脩羅王 各與若干百千眷屬俱 有四迦樓羅王 大威德迦樓羅王 大身迦樓羅王 大滿迦樓羅王 如意迦
 樓羅王 各與若干百千眷屬俱 韋提希子阿闍世王 與若干百千眷屬俱 各禮佛足退坐一面
 그 일후미 文殊師利菩薩와 觀世音菩薩와 得大勢菩薩와 常精進菩薩와 不休息菩薩와 寶掌菩薩와 藥
 王菩薩와 勇施菩薩와 寶月菩薩와 月光菩薩와 滿月菩薩와 大力菩薩와 無量力菩薩와 越三界菩薩와 跋
 陀婆羅菩薩와 彌勒菩薩와 寶積菩薩와 導師菩薩와 이러듯□菩薩摩訶薩八萬 사□미 다 와 거시며
 그 저기 釋提桓因이 眷屬二萬天子 □려 와 이시며 □ 名月天子와 (名月天子□ □리라) 普香天子
 와 (普香天子□ 버리라) 寶光天子와 (寶光天子□ □라) 四大天王이 (四大天王□ 持國天王 增長天
 王 廣目天王 多聞天王이라) 眷屬一萬天子 □려 와 이시며 自在天子와 (自在天子□ 化樂天에 위두
 □니라) 大自在天子(大自在天子□ 他化天에 위두□니라) 眷屬三萬天子 □려 와 이시며 娑婆世界
 에 위두□ 梵天王尸棄大梵과 (尸棄□ 大梵天王스 일후미니 初禪三天에 위두□니라 二禪으로 우흔
 말□미 업슬□ 大梵天王이 娑婆世界□ □□아□니라) 光明大梵□히 (光明大梵은 二禪三天에 위두
 □니라) 眷屬一萬二千天子 □려 와 이시며 (諸天을 아니 다 니를 □□ 實엔 다 왜□니라) 여
 름 龍王 難陀龍王과 跋難陀龍王과 娑伽羅龍王과 和修吉龍王과 德叉迦龍王과 阿那婆達多龍王과 摩那
 斯龍王과 優鉢羅龍王□히 各各 若干 百千眷屬 □려 와 이시며 (難陀□ 깃브다 □논 마리오 跋
 □ 어디다 □논 마리니 時節스 비를 깃비 □리와 어딘 德이 잇다 □논 □디라 이 두 龍이
 兄弟니 目連의 降服□온 龍이라 娑伽羅□ 娑竭羅(라 和修吉□ 머리 하다 □논 마리오 德叉迦□
 毒□ 내□다 □논 마리오 阿那婆達多□ 東土스 아래 熱惱(업다 흔 마리니 그르 날어 阿耨

達이라 □□니 너느 龍이 네 가짓 熱惱ㅣ 잇거늘 이 龍□ 업스니라 네 가짓 熱惱□ 金翅鳥ㅣ
 먹는 菩와 姪欲行□ 時節에 本來스 몸 도로 □외□ 菩와 비느레 허근 벌에 잇□ 菩와 더□
 몰애 모매 블□ 菩와라 摩那斯□ 큰 모미라 □논 마리오 優鉢羅□ 이 龍이 青蓮 모새 이실
 □ 일흥 지흥니라 若干□ 一定티 아니 □ 數ㅣ니 온 니르힐 씨라) 네 緊那羅王 法緊那羅王과
 妙法緊那羅王과 大法緊那羅王과 持法緊那羅王이 各各 若干 百千眷屬 □려 와 이시며(法緊□ 四諦
 □ 브르고 妙緊□ 十二因緣을 브르고 大緊□ 六度□ 브르고 持緊□ 一乘□ 브르니라 六度□
 六波羅蜜이라) 네 乾闥婆王 樂乾闥婆王과 樂音乾闥婆王과 美乾闥婆王과 美音乾闥婆王이 各各若干百千
 眷屬 □려 와 이시며(樂□ 풍□니 놀애 춤트릿 □죄라 樂音은 풍룻 소리니 뵈 티□ □□머
 시우대□ 니르니라 美□ 아□다□ 씨니 풍룻 □죽 □중에 □잘□ 씨라 美音은 풍룻 소리 中에
 □ 도□ 씨라) 네 阿脩羅王 婆稚阿脩羅王과 佉羅騫馱阿脩羅王과 毗摩質多脩阿脩羅王과 羅□阿脩羅
 王이 各各若干百千眷屬 □려 와 이시며(婆稚□ 畝□□다 畝 마리니 싸호□ 즐겨 제 軍 알□
 가다가 帝釋손□ □□□니라 佉羅騫馱□ 엇게 낡다 畝 마리니 바□ 므를 소사오□게 □□니라
 毗摩質多□ 바□ 畝 겹 소리라 畝 마리니 바□ 므를 터 겨를 니르왈□니라 羅睺阿脩羅王□ 本
 來스 □ 기리 七百由旬이오 큰 威力이 잇□니 제 너교□ 切利天王과 日月諸天이 내 머리 우희
 □니□니 日月을 자바다가 귀엇 구슬호리라고 □□ 嗔心 날어 兵馬 니르와다가 싸흠□ 찌그
 帝釋의 알□ 軍이 몬저 □ 光□ 辟아 阿脩羅□ 누늘 쏘아 몬 보게 □야□ 阿脩羅ㅣ 소□로
 □□ □리와□ 日蝕□□니라 阿脩羅ㅣ 네 가지니 鬼趣에 브트니□ 컷 것 길헤 이셔 法護持□는
 히□로 神通□ 일워 뷔유에 드니 이 阿脩羅□ 알 □ 나□니라 人趣에 브트니□ 하□해서 德
 이 사오나□ □러디여 □려 □□ 겨역 사□니 이 阿脩羅□ □야 나□니라 天趣에 브트니□ 世
 界□ 자바 가져 히미 □□ 차 저픈 거시 업서 梵王帝釋四天王과 견구□니 이 阿脩羅□ □외야
 나□니라 畜生趣에 브트니□ 各別히 사오나□ 阿脩羅ㅣ 바□ 가온□ 나야 바□ 들 □□ 궁□

드러 이서 아□□□ 虚空애 나아 노다가 나조□ 므레 가 자□니 이 阿脩羅□ 축축□ 氣韻으로
 □외야 나□니라 이 法華애 阿脩羅□□ 天趣—라) 네 迦樓羅王 大威徳迦樓羅王과 大身迦樓羅王
 과 大滿迦樓羅王과 如意迦樓羅王이 各各若干百千眷 □려 와 이시며 (大威□ 큰 威嚴이니 龍□ 저
 히□니라 大身□ 큰 모이라 大滿□ □□□ □□□ 씨니 龍 자바 머구을 □데 足□ 씨라 如意□
 머개예 如意珠 이실 씨라 夜叉와 摩睺羅와□ 아니 니를 □□ 實엔 다 왓더니라) 韋提希의 아
 □ 阿闍世王이 若干百千眷屬 □려 와 各各 부럿 바래 禮數□□고 □녁 面에 들러 안□니라 (各
 各□ 우를 다 닐은 마리라)

その名が文殊師利菩薩と觀世音菩薩と得大勢菩薩と常精進菩薩と不休息菩薩と宝掌菩薩と薬王菩薩と勇施菩薩
 と宝月菩薩と月光菩薩と満月菩薩と大力菩薩と無量力菩薩と越三界菩薩と跋陀婆羅菩薩と弥勒菩薩と宝積菩薩と
 導師菩薩と、このような菩薩摩訶薩八万人がみな来ておられ、その時、帝釈天が眷屬二万の天子を連れて来てい
 て、また名月天子と(名月天子は月である。)普香天子と(普香天子は星である。)宝光天子(宝光天子は日であ
 る。)四大天王が(四大天王は持国天王、增長天王、広目天王、多聞天王である。)眷屬一万天子を連れて来てい
 て、自在天子と(自在天子は化樂天で主位の方である。)大自在天子が(大自在天子は他化天で主位の方である。)眷
 屬三万天子を連れて来ていて、娑婆世界で主たる梵天王尸棄大梵と(尸棄は大梵天王の名前であり、初禪三天
 で主たる方である。二禪から上は単語がない故に大梵天王が娑婆世界を治めている方である。)光明大梵たちが
 (光明大梵は二禪三天で主たる方である。)眷屬一万二千天子を連れて来ていて(諸天をすべて言わないだけで
 あって実際にはみな来ていたのである。)八の龍王、難陀龍王と跋難陀龍王と娑伽羅龍王と和修吉龍王と徳叉迦
 龍王と阿那婆達多龍王と摩那斯龍王と優鉢羅龍王たちがそれぞれ百千の眷屬を連れて来ていて(難陀は喜しいと
 いう語で、跋は善良だという語である。時の雨を喜んで降らし、善なる徳があるという意味である。この二匹の
 龍が兄弟で目連が降服させた龍である。娑伽羅は娑竭羅である。和修吉は頭が多いという語で徳叉迦は毒を出す
 という語で、阿那婆達多是東土の語で熱惱がないという語で誤って言い阿耨達という。他の龍が四種の熱惱があ

るのだが、この龍はないのである。四つの熱惱は、金翅鳥が食べる苦と姪欲を行う時に本来の身体通りになる苦と鱗に小さな虫がいる苦と熱い砂が体につく苦とである。摩耶斯は大きな体であるという語であり、優鉢羅はこの龍が青蓮の池にいたので、名付けたのである。若干は定っていない数であり、数えられないものである。) 四の緊那羅王、法緊那羅王と妙法緊那羅王と大法緊那羅王と持法緊那羅王が各各若干の百千の眷属を連れて来ていて(法緊は四諦を号し、妙緊は十二因縁を号し、大緊は六度を号し、持緊は一乗を号しているのである。六度は六波羅蜜である。) 四の乾闥婆王、樂乾闥婆王と樂音乾闥婆王と美乾闥婆王と美音乾闥婆王がそれぞれ若干百千眷属を連れて来ていて(樂は音楽であり、歌舞等の芸である。樂音は音楽の音で、鼓を打つ節であり、管弦を言うのである。美は美しいことで、音楽の芸のなかで最もうまくやることである。美音は音楽の音の中で最も善いものである。) 四の阿修羅王、婆稚阿修羅王と佉羅騫駄阿修羅王と毘摩質多羅阿修羅王と羅睺阿修羅王がそれぞれ眷属若干百千を連れて来ていて、(婆稚は縛られるという語で、争いを好み、自ら軍の前に行き、帝釈に縛られるのである。佉羅騫は肩が広いという語で、海の水を高く立ちのぼらせるのである。毗摩質多は海の波の音であるという言葉で、海の水を打ち、波を起こすのである。羅睺阿脩羅王は本来の身長が七百由旬で、大きな威力がある。自ら思うに切利天王と日月諸天が自分の上で動いている。日月を捕えて、耳の珠にしようとし、とてつもなく怒りの心をおこし、兵を挙げ、たたかひをする時に帝釈の前の軍が先に日の光を放ち、阿修羅の目を射り、見えなくすると、阿修羅が手で目を遮ると、日食するのである。阿修羅は四種類である。鬼趣につくものは鬼の道におり、法を護持する力で神通を起こし、空に入り、この阿修羅は卵を割って生まれるのである。人趣につくものは天で徳がよくなく振り落されて、降りて日月の傍に住む。この阿修羅は腹んで生まれるものである。天趣につくものは世界をつかみ持ち、力が非常に満ち、恐いものがなく、梵天帝釈四天王と競う。この阿修羅は成りて生まれるのである。畜生趣につくものは、各別に悪い阿修羅が海の中に行き、海の水がわく穴に入っており、朝は虚空に出て遊び、夕方は水に行き眠る。この阿修羅は湿った気で出来て生まれるものである。この法華において阿修羅たちは天趣である。) 四の迦楼羅王、大威徳迦楼羅王と大身迦楼羅王と大満迦楼羅王と如意迦楼羅王

がそれぞれ若干百千の眷属を連れて来ていて(大威は大きな威厳で、龍を脅すのである。大身は大きな体である。大満は最も満ちること、龍を捕え、食べることで意に足るのである。如意はのど首に如意珠があることである。夜叉と摩睺羅とを述べてないだけで、実際にはみな来ていたのである。) 韋提希の息子阿闍世王が若干百千の眷属を連れて来て、それぞれ仏の足に礼したてまつり、一方の側に退き、坐ったのである。(各各は上をすべて言う語である。)

□名月。□名日。위두□動主位を示める。△爲頭。○昊助より、くから。우名上。말名言葉。□接であるので。二章か。□□알다他治める。□□接だけであって。왜□나라は、와잇던이라。

여數八。잇다形うれしい。잇비副うれしく。□리오다他下だす。自動詞は□리다、三二章あ。□名意味、志。두數二の連体形。의助連体修飾句の中では主格を表わす。□다他させる。□다の使役形。□誤って。너二連他の。네數四の連体形。거三接だとすると。거は前述の内容が確定していることを表わす。四章え。도로副二元に、元通りに。□외다自なる。九八章あ。혁다形小さい。벌에名虫。덫다(口変)形熱い。몰애名砂。부다自注ぐ。질다他(名前を)つける。니三副すべて、一切、到底。부르다他号する。名つける。풍류名音楽。△風流。音が風に流れる。놀애名歌。춤名舞。트릿트助+틀+엇 などにおける。□조名芸才。름名鼓。타다他打つ。□□名節。시우대名管弦。아□답다(口変)形美しい。□副最も。얼□□□다自縛りつけられる。他動詞は얼□다。싸름名鬨い。즐기다他好む。제副自ら。알□前に。一六章い。□□□다自縛られる。他動詞は□다。엿게名肩。넙다形広い。五六章あ。바□名海。름名水。소사오□□다自突きあがる。걸名波。기리名長さ。너지다動考える、思う。오□接後で具体的な内容を述べる。一三章う □니다自動く。行動する。구슬□다、구슬珠。□□は利用できる対象にすることを表す。□□副非常に。문저副先に。七章き。퍼다他放つ。語幹の後に아がつき文が続く。連用形+□接事実を原因・理由として仮定する。□로助手段を表す。□리오다他遮る。틀다自つく。귀名鬼 길名道。일우다他成す、自動詞は일다。一三章う。뷔다形空だ。□다他割る、破る。하□名天、空。사오남다(口変)形悪い、粗暴だ。□리다自落ちる。振り

落とされる。八七章い。□□[他]腹む。□□[副]非常に。지□□[形]恐い。一五章う、一一五章あ。것구□□[自]競う。くらべる。~□□:□□[自]라の型で、□□は接続語尾、□□[自]라が終結語尾である。□□□□[自]成る。九八章あ。가온□□[名]なか、中。나아、三五章い。□□□□[自]漏れ出す。공□□[名]穴。아□□[名]朝。놀□□[自]遊ぶ。나조□□[名]夕方。축축□□[形]じめじめした、湿っぽい。저히□□[他]脅す。自動詞は절다、形容詞は저프다。□□□□[形]いっぱいだ。머개[名]のどくび。아□□[名]息子。禮數□□□□[動]身分に応じた礼をする。□□□□[名]一方。□□□□[名]一變。「動退く。

爾時世尊 四衆圍遶 供養恭敬尊重讚歎

그 저기 世尊□□ 四衆이 圍遶□□□□ 이서 供養□□□□며 恭敬□□□□며 尊重히 너기□□ 讚嘆□□□□
 더니

その時、世尊のもとに四衆が取り囲みたてまつり、供養したてまつり、恭敬したてまつり、尊く思いたてまつり、讚嘆したてまつった。

圍遶□□□□[動]周りを取り囲む。

爲諸菩薩說大乘經 名無量義教菩薩法佛所護念

菩薩□□ 위□□사 大乘經을 니르시니 (大乘經은 大乘인 經이라) 일후미 無量義니 (無量義□□ 그지업슨 □□□라 혼 마리라) 菩薩 □□□치시는 法이라 부더 護念□□시는 배라

菩薩たちのために大乘経を説きたまい (大乘経は大乘における経である。) 名が無量義で (無量義は果てがない意味だという語である。) 菩薩を教えたまう法である。仏が心にかけて守りたまうところである。

佛說此經已 結加趺坐 入於無量義處三昧 身心不動 是時天雨曼陀羅華 摩訶曼陀羅華 曼殊沙華 摩訶曼殊沙華 而散佛上及諸大衆 普佛世界六種震動

부더 이 經 니르시고 結加趺坐□□사 無量義處三昧에 드르사 (處는 고□□라) 음과 □□□과 음즉디 아니 □□야 거시거늘 그 저기 하□□해서 曼陀羅華와 摩訶曼陀羅華와 曼殊沙華와 摩訶曼殊沙華□□ 부더 우과 大衆□□□□ 그□□ 비흐며 (曼陀羅□□ □□데 맛□□□다 혼 마리오 曼殊沙□□ 보□□랍다 혼 마리오

니 다 하□ 貴□ 고지라) 너는 世界 여섯 가지로 震動□되니

仏がこの経を説きたまいて結加跏趺坐なされ無量義処三昧に入りたまうと(処はどこである。)体と心とが動かないようになりたまうと、その時、天が曼陀羅華と摩訶曼陀羅華と曼殊沙華と摩訶曼殊沙華を仏の上と大衆たちのもとにふらせ(曼陀羅は心に心地よいという語で、曼殊沙華は柔いという語である。みな天の貴い花である。)広い仏の世界が六種に震動した。

三[名]ところ。음즉다[自動]く。거言接前述の状態になると次のことが起こるといふ意で、くすると。하□해서、하□음+애서助場所が主語になったとき主格を表わす。□□[副]そのもとに。一一二一章あ。비흐다[動]降らす。撒く。自動詞も同形。맛□□□[形]適っている、心地よい。보□랍다(보[変]形柔らかい、柔軟だ。릿[名]花、二章き。여섯[数]六。다[終]過去の叙述

爾時會中比丘比丘尼優婆塞優婆夷 天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩□羅伽人非人 及諸小王轉輪聖王是諸大衆得未曾有 歡喜合掌一心觀佛

□□ 會中엿(會中은 모엿□ 中이라)比丘 比丘尼 優婆塞 優婆夷 天龍 夜叉 乾闥婆 阿脩羅 迦樓羅 緊那羅 摩□羅迦 人 非人과 □ 諸小王과(諸小王□ 여러 여러 王이라)轉輪聖王과 이 大衆□히 네 언던 이□ 언□□ 歡喜合掌□야(歡喜□ 잇글 씨라)□ □□□로 부터를 보□□되니

その時、會中の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅迦、人、非人とおよび諸々の小王(諸小王は諸々の小さな王である。)轉輪聖王とこの大衆たちがかつて無かったことを得たてまつり歡喜し合掌して(歡喜は喜こぶことである。)一心に仏を見たてまつっていた。

잇[助]の、おいて。네[副]かつて。잇□다[自動]く喜ぶ、他動詞は잇기다、二七章う。잇□다[形]喜こばしい。九一章う。

爾時佛放眉間白毫相光 照東方萬八千世界 靡不周遍 下至阿鼻地獄 上至阿迦尼□天 於此世界 盡見彼土六趣衆生 又見彼土現在諸佛 及聞諸佛所說經法 并見彼諸比丘比丘尼優婆塞優婆夷諸修行得道者 復見諸菩薩摩訶薩種種因緣種種信解種種相貌行菩薩道 復見諸佛般涅槃者 復見諸佛般涅槃後以佛舍利起七寶塔

그 □ 부테 眉間白毫相잇 光明을 퍼샤 東方잇 一萬八千世界 □ 비취샤 □ 아래로 阿鼻地獄애 니
 를오 우흐로 阿迦 □ □天애 니르니 이 世界에서 더 □ 했 六趣衆生 □ 다 보며 □ 더 □ 해 거신
 諸佛도 보 □ □ 며 諸佛 니르시논 經法도 듣 □ □ 며 더 □ 했 比丘 優婆塞 優婆夷 □ 脩業
 □ 야 得道 □ □ 사 □ 도 조처 보며 (得道 □ 道理 □ 得 □ 씨라) □ 菩薩摩訶薩 □ 히 種種因緣과 種
 種信解와 (解 □ 알 씨니 信호 □ 로 드러 法을 알 씨라) 種種相貌로 菩薩入 道理行 □ 시논 □ 도 보
 며 (相貌 □ 양 □ 라) □ 諸佛이 般涅槃 □ 시 □ 니도 보 □ □ 며 (般涅槃 □ 究竟涅槃이라) □ 諸佛이 般
 涅槃 □ 신 後애 부텃舍利로 七寶塔 세 □ 는 □ 도 보리러니

その時、仏が眉間白毫相から光明を放ち、東方の一萬八千世界を照らしたまうと、下に阿鼻地獄に至り、上に
 阿迦膩吒天に至り、この世界から彼の地の六趣の衆生をみな見て、また彼の地にいらつした諸々の仏も見た
 てまつり、諸々の仏が説きたまう経や法も聞きたてまつり、彼の地の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷が修行し、
 得道する人も合わせて見、(得道は道理を得ることである。) また菩薩摩訶薩たちが種種因縁と種種信解と(解は
 分かることで、信ずることから入り、法をわかることである。) 様々な形で菩薩の道を行なわれるさまも見て(相
 貌は様子である。) また諸々の仏が般涅槃したまうのも見たてまつり(般涅槃は究竟涅槃である。) また諸々の仏
 が般涅槃したもうた後に仏の舍利で七宝の塔を建てまつるさまも見るのであった。

비취샤 □ 動照らす。 □ 接統語幹に直接つく。前述の内容が前提条件であることを示し、後のことが生じるとい
 う関係を表わす。 아래 □ 名下。 니를 □ 直至る。 예셔 □ 格位格を表わす。 〰 において。 〰 連あ。 □ 名地。 조처
 다 □ 他合わせる。 □ 名さま、様子。 □ □ 名様子。 세 □ 他起てる。 보리러니、보 + 이 + 러니。

爾時彌勒菩薩作是念 今者世尊現神變相

그 □ 彌勒菩薩이 너기샤 □ 오 □ 나래 世尊이 神奇 □ □ 變化人 相 □ 뵈시 □ 니

その時、彌勒菩薩が思われるに、今日の日に世尊が神奇なる変化の相を見せたまわる。

오 □ 名今日。 로 □ 形容詞転成語尾 □ □ 다 の連体形。

以何因縁而有此瑞

엇던 因縁으로 이런 祥瑞 잇거시오

どんな因縁でこの様な吉兆があったのか。

엇던[連]どんな。잇거시오、잇+거(既然) 시尊敬の補助語幹。二章え。노、終結語尾で疑問をあらわす。疑問詞を含む文で用いる。

今佛世尊入于三昧 是不可思議現希有事

이제 世尊이 三昧에 드르시니 이 不可思議엿 希有□ 이□ 뵈시오니 (希□ 드믈 씨오 有는

이실 씨니 希有는 드므리 잇다 혼 □디라)

今、世尊が三昧に入りたまひ、この不可思議なる希有のを見せたまう。(希は稀であることで、有はあることで希有は稀にあるという意味である。)

드므리[副]稀に。

當以問誰 誰能答者 復作此念 是文殊師利法王之子 已會親近供養過去無量諸佛 必應見此希有之相 我今

當問

늘 드브러 무리□ □리며 누□ 能히 對答□려뇨 □시고 □ 너기샤□ 文殊師利□ 法王入 아□

리라 디나거신 無量諸佛□ □마 親近히 供養□□□ 이실□(親□ 조올아□ 씨오 近은 갓가□ 씨

라) □다□ 이런 希有□ 相□ 보□□ 잇□니 내 이제 무로리라

誰に問うべきで、誰が能く答えるであろうかと思われ、また思われるに、文殊師利は法王の息子である。過ぎ去りし無量の諸々の仏に対し、既に親しみ近づき供養したてまつっているので(親は親しいことで、近は近いことである)必ずこのような希有な相を見たてまつっている。私が今問おう。

늘 누(誰) + ㄹ. 드브러 ㄹ 드브러で助詞에서と同じような機能をもつ。言葉を発する相手を指示する。

□語尾限定を強調する。連用形+□+□ すべきだ。닌代誰。一五章い。리[語尾]補助語幹。前の内容が頭

の中で思うことを示す。디나다動過ぎる。□올안다(□變)「形親しい。가깝다(□變)「形近い。□다□副「きつと、必ず。오리라終結語尾意志を表わす。

爾時比丘比丘尼優婆塞優婆夷 及諸天龍鬼神等咸作此念 是佛光明神之相 今當問誰

□ □ 比丘 比丘尼 優婆塞 優婆夷와 天 龍 鬼神□토 다 나고□ 이 부딪 神通□신 相□ 이 제 놀 더뜨러 무르려뇨 □더니

その時、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷と天、龍、鬼神たちもみな考えるに、この仏の神通の相をいま誰に尋ねようかと思った。

□토 □+도たちも。무르려뇨 묻+으려뇨、으려는意志をあらわす。

爾時彌勒菩薩欲自決疑 又觀四衆比丘比丘尼優婆塞優婆夷 及諸天龍鬼神等衆會之心 而問文殊師利言 以何

因緣而有此瑞神通之相 放大光明照于東方萬八千土 悉見彼佛國界莊嚴 於是彌勒菩薩 欲重宣此義 以偈問曰

文殊師利 導師何故 眉間白毫 大光普照 雨曼陀羅 曼殊沙華 梅檀香風 悅可衆心 以是因緣 地皆嚴淨

而此世界 六種震動 時四部衆 咸皆歡喜 身意快然 得未曾得

□ □ 彌勒菩薩이 □갓 疑心도 決□고져 □시며 □ 모□ □□□ 보시고 文殊師利□ 묻□□사

□ 文殊師利여 導師ㅣ 언던 전□로 (導師□ 法 앓외□ 스스□니 如來□ □□시니라) 眉間白豪엇

大光이 너비 비취시니 曼陀羅花 曼殊沙華ㅣ 비흐며 梅檀香入 □□미 모□ □□□ 즐기게 □고

이런 因緣으로 □히 다 식식기 조□며 이 世界 여섯 가지로 震動□니 四部衆이 다 기□ 몸

과 □과 흰□야 네 업던 이□ 얻□□□뇨

その時、彌勒菩薩が御自身の疑念も解決しようと思われ、また皆の心を見たまいて文殊師利に問いたてまつりたまうに、文殊師利よ。導師がどんな訳で(導師は法に導く師であり 如来を申し上げたのである。)眉間白毫より大光があまねく照したまい、曼陀羅花、曼殊沙華が降り、梅檀香の風が皆の心を楽しませ、この因縁で地は厳かに浄まり、この世界は六種に震動し、四部衆がみな喜び、体と心が快く、かつて無かったことを得たてまつ

たのか。

□가[代]自分、他者が高めて使う語。二五章あ。□고저、(し) ようと。모□[連]皆の。여[助]呼格を表わす。전□로 전□理由+로。잇외다[動]導く。□다[他]申す。一三章あ。비흐다[動]降る。식스기[副]嚴かに。조□다[他]淨める。흰□다[形]快い

眉間光明 照于東方 萬八千土 皆如金色 從阿鼻獄 上至有頂 諸世界中 六道衆生 生死所趣 善惡業緣
受報好醜 於此悉見 又覩諸佛 聖主師子 演說經典 微妙第一 其聲清淨 出柔軟音 教諸菩薩 無數億萬
梵音深妙 令人樂聞 各於世界 講說正法 種種因緣 以無量喻 照明佛法 開悟衆生 若人遭苦 厭老病死
爲說涅槃 盡諸苦際 若人有福 會供養佛 志求勝法 爲說緣覺 若有佛子 修種種行 求無上慧 爲說淨道
眉間光 光明이 東方□ 비취샤 一萬八千 □히 다 金色이 □□야 阿鼻地獄부터 有頂天에 니르
시니 (有頂은 色 이쇼맛 □바기라) 을잇 世界中잇 六道衆生□ (六道□ 여섯 길히니 六趣—라) 주
그며 사라 가는 길헛 도□며 구즌 因緣으로 도□며 구즌 果報 受호□ 이□서 다 보며 □ 보
□□□ 諸佛이 經典을 블어 니□샤 (典은 尊□야 여저들 씨니 經을 尊□야 여저릿□ 거실□
經典이라 □□니라) 菩薩 無數億萬을 □□치시니 梵音이 김고 微妙□샤 (梵音은 清淨□ 音聲 이
시니라) 사□미 즐겨 든□게 □시며 各各 世界에 正法을 講論□야 니□샤 種種因緣과 그지업스
알외요로 부터 法을 □기샤 衆生□ 알에 □시며 사□미 受苦□ 맛나아 老病死□ 슬□야 □거
든 위□야 涅槃□ 니□샤 受苦□ 업게 □시며 사□미 有福□야 (有福□ 福 이실 씨라) 부터를
供養□□□ 도□ 法 求□거든 위□야 緣覺□ 니르시며 佛子— 種種修行□야 無上智慧□ 求□거든
(佛子□ 부터 아□리라 菩薩이 부터 法 으르□□미 아□리 아□ 천□ 들러 가주미 □□□ 菩
薩□ 부터 아□리라 □□니라) 위□야 조□ 道理 니르시□다

眉間からの光明は東方を照らしたまい、一万八千の地が皆金色のようで、阿鼻地獄から有頂天に至り(有頂は

色があるものにおいて頂辺である。) 諸々の世界の中において六道衆生の(六道は六つの道で、六趣である。)死に生きて行く途中で善悪の因縁で善悪の果報を受けることをこの場ですべて見て、また見たてまつるに、諸仏が經典を説かれ(典は尊び保管しておくことで、経を尊び、保管しておいているものである)、經典と言うのである。)菩薩が無数億万を教えたまい、梵音が深く、微妙で(梵音は清浄な音声があるのである。)人が楽しく聞くようにされたまい、それぞれの世界において正しい教えを講論され説きたまい、種々の因縁と果てのない諭しで、仏の法を明らかになされ、衆生を悟らしめたまい、人が苦に遭い、老病死を悲しめば、為に涅槃を説きたまい、苦をないようにしたまい、人間が福ありて(有福は福があることである。)仏を供養したてまつり、善い法を求めれば、為に縁覚を説きたまい、仏子が種々の修業をして無上の智慧を求めれば(仏子は仏の息子である。菩薩が仏の法を受けたてまつることが、子が父親の財産を受け継ぐことと同じなので、菩薩を仏の息子と云うのである。)為に淨い道理を説きたまわれる。

□□□形下うだ。主格助詞をとる。브다助より。順序のはじまり。이쇼맛 이시+음+맛 あること。□바기名てっぺん。음의連諸々の。[뫼다]形醜い。よくない。[뫼다]他わかりやすく解く。여저두다他並べておく。保管する。七章か。알외음名諭し、알외다他知らせる。□기다他照らす、明らかにする。受苦名苦。[受다]他悲しむ。므르다(르変)[他受けつく。천량名財産。을러가지다他譲りうける。□다語尾現在の叙述。

文殊師利 我住於此 見聞若斯 及千億事 如是衆多 今當略說
文殊師利여 내 이□ 이셔 보며 드루미 이러□며 □ 千億 가짓 이리 하니 이제 어들 닐오리
라

文殊師利よ。私がここに居て、見聞したことがこのようであり、また千億の種類の事が多く、今略して述べようと思ふ。

어늘副略して、大体。

我見彼土 恒沙菩薩 種種因縁 而求佛道 或有行施 金銀珊瑚 眞珠摩尼 碑磨瑪瑙 金剛諸珍 奴婢車乘

寶飾輦輿 歡喜布施 廻向佛道 願得是乘 三界第一 諸佛所歎 或有菩薩 駟馬寶車 欄楯華蓋 軒飾布施
 復見菩薩 身肉手足 及妻子施 求無上道 又見菩薩 頭自身體 欣樂施與 求佛智慧

내 더 □렛 恒沙菩薩이 (恒沙□ 恒河沙—라) 種種 因緣으로 부엌 道理 求□는 야□ 본 □布

施□ 호□ 金銀 珊瑚 眞珠 摩尼 碑磬 瑪瑙 金剛 여러 보□와 奴婢와 (奴□ 남진 조□오 婢□

거집 조□라) 술위와 보□로 □운 □과로 즐겨 布施□야 佛道□ 向□야 三界第一 諸佛 讚嘆

□시는 乘□ 得고져 願□리도 이시며 菩薩이 네 □메□ 寶車와 欄楯과 빗난 蓋와 軒飾□로

布施□리도 이시며 (軒은 술위 우히 欄干너리니 軒飾은 軒잇 □유미라) □菩薩이 몸과 □과

발와 妻眷과 子息과로 布施□야 無上道□ 求□리도 보며 □菩薩이 머리와 눈과 몸과로 즐겨

布施□야 부엌 智慧□ 求□리도 보리로다

私が彼の地における恒沙の菩薩が(恒沙は恒河沙である。)種々の因縁で仏の道理を求める様を見たところは、布施をするに金銀、珊瑚、眞珠、摩尼、碑磬、瑪瑙、金剛いろいろの宝物と奴婢と(奴は男のしもべ、婢は女のしもべである。)車と宝で飾つた輿とで、喜んで布施し、仏道に向い三界第一の諸々の仏が讚嘆したまう乗を得ようと願う者もあり、菩薩が四匹の馬をつないだ宝車と欄楯と色あざやかな蓋と軒飾で布施をするものもあり、(軒は車の上にある欄干の板で、軒飾は軒にある飾りである。)また菩薩が体と身と手と足と妻と子とで布施をして、無上の道を求めるものもみて、また菩薩が頭と目と体とで喜んで布施をして、仏の智慧を求めるのも見るのである。

□名様。□名ところ。보□名宝。남진名男。거집名女。□名しもべ。僕。술위名車。□미다他飾る。

□名輿。□음名飾り。□名馬。메□다他つなく。빗나다形色あざやかだ。널名板。□음名肉。身。이로

다である、指定詞の叙述形。

文殊師利 我見諸王 往詣佛所 問無上道 便捨樂土 宮殿臣妾 剃除鬚髮 而被法服 或見菩薩 而作比丘

獨處閑靜 樂誦經典 又見菩薩 勇猛精進 入於深山 思惟佛道 又見離欲 常處空閑 深修禪定 得五神通

又見菩薩 安禪合掌 以千萬偈 讚諸法王 復見菩薩 智深志固 能問諸佛 聞悉受持 又見佛子 定慧具足
 以無量喻 爲衆講法 欣樂說法 化諸菩薩 破魔兵衆 而擊法鼓 又見菩薩 寂然宴默 天龍恭敬 不以爲喜
 又見菩薩 處林放光 濟地獄苦 今入佛道 又見佛子 未嘗睡眠 經行林中 勤求佛道 又見具戒 威儀無口
 淨如寶珠 以求佛道 又見佛子 住忍辱力 增上慢人 惡罵捶打 皆悉能忍 以求佛道 又見菩薩 離諸戲笑
 及癡眷屬 親近智者 一心除亂 攝念山林 億千萬歲 以求佛道 或見菩薩 餚饈飲食 百種湯藥 施佛及僧
 名衣上服 價值千萬 或無價衣 施佛及僧 千萬億種 栴檀寶舍 衆妙臥具 施佛及僧 清淨園林 華菓茂盛
 流泉浴池 施佛及僧 如是等施 種果微妙 觀喜無厭 求無上道 或有菩薩 說寂滅法 種種教詔 無數衆生
 或見菩薩 觀諸法性 無有二相 猶如虛空 又見佛子 心無所著 以此妙慧 求無上道
 文殊師利여 여러 왕□히 부텨고 나□가 無上道理□ 을□고 도□ 나□라□와 宮殿과 臣下와 고□마□
 □리고 머리 가□ 法服□ 니□비□도 보며 (法服□ 法衣 오시라) 菩薩이 주□ □외야 □오□
 거르로□ 이셔 經을 즐겨 외오리도 보며 □ 菩薩이 勇猛精神□야 深山애 드러 佛道 □□□리도
 보며 □ 貪欲□ 여히여 □네 빈 □ 이셔 禪定을 기피 다□ 五神通□ 得□리도 보며 □ 菩
 薩이 便安히 禪定□야 合掌□야 千萬偈로 을잇 法王□ 讚嘆□□□리도 보며 □ 菩薩이 智慧 김
 고 □디 구더 能히 諸佛□ 喞□□ 들□□면 다 바다 디니는 □도 보며 □ 佛子 定과 慧와
 □자 그지업슨 알외요□로 한 사□ 위□야 法講論□며 즐겨 說法□야 菩薩□ □외오며 魔王^스
 兵馬□ 鎗오 法鼓□ 티는 □도 보며 (鼓□ 부피라) □ 菩薩이 便安히 □□□야 잇거든 天
 龍이 恭敬□야도 깃디 아니 □리도 보며 □ 菩薩이 수프레 이셔 放光□야 地獄 受苦□ 濟度□
 야 佛道애 들의 □는 □도 보며 □ 佛子 自디 아니 □야 수프레 두루 □녀 佛道 브즈러니
 求□는 □도 보며 □ 警戒 □자 威儀 이즌 □ 업서 조호미 寶珠 □□야 佛道 求□는 □도
 보며 □ 佛子 忍辱力애 住□야 增上慢□ 사□미 그지즈며 티거든 다 □마 佛道 求□는 □도

도 보며 □菩薩이 노□과 우□과 어린眷屬□여희오 어린 사□□갓가□□야 □□□로
 亂□더러 (亂□어즈러□씨라) 뭇 수프를 □□□야 億千萬世□佛道 求□논 □도 보며 菩
 薩이 도□차반과 온 가짓 藥材로 부터와 □관 □□布施□며 일홍 난 도□오시 비디 千萬
 이 □며 빈 업슨 오□로 (하 貴□야 비디 업스니라) 부터와 중관 □□布施□며 千萬 가짓 栴
 檀香 보□옛 집과 貴□ 니블로 부터와 □관 □□布施□며 淸淨□ 東山애 곳과 果實와 盛코
 흐르는 □과 沐浴□ 모□로 부터와 중관 □□布施□야 이러트시 種種 微妙□ 거슬 布施호□
 즐거 슬히 아니 너겨 無上道□ 求□논 □도 보며 菩薩이 寂滅□ 法을 닐어 種種□로 無數衆生
 □□치리도 이시며 菩薩이 을읏 法性을 보□ 두 가짓 相이 업서 虛空 □흥도 보며 □佛
 子— □□매 着이 업서 (着□ 브티□□ 씨라) 이런 微妙□ 智慧로 無上道理 求□논 □도 보리로
 다

文殊師利よ。諸々の王たちが仏のもとに進みゆき、無上の道理を問いたてまつり、善い国と宮殿と家来と腰元
 を捨て、頭を剃り、法衣を着るのも見て(法衣は法における衣である。)菩薩が比丘となり、独り静かにいて、
 經を楽しんで唱えるのも見て、また菩薩が勇猛精進して、深山に入り、仏の道を思念するのも見て、また、欲
 を離れ常に空なる所において、禪定を深く修めて、五神通を得るのも見て、また菩薩が安らかに禪定し、合掌し、
 千万偈で諸々の法王を讃嘆するのも見て、また菩薩が智慧を深く意を固くし、能く諸々の仏のもとで問いたてま
 つり、聞きたてまつれば、すべて受け取る様も見て、また仏子が定と慧とが備わり、数知れぬ喩しで多くの人の
 ため法を講論し、喜んで説法をし、菩薩となし、魔王の兵馬を破り、教えの大鼓を打つ様も見て(鼓は大鼓であ
 る。)また菩薩が安らかに黙黙としていと、天、龍が恭敬しても、喜ばないのも見て、また菩薩が林にいて、
 光を放ち、地獄の苦しみを救い、濟度し、仏の道に入らせる様も見て、また仏子が眠らずに林をぐるぐる歩き回
 り、仏の道を懸命に求める様も見て、また戒を守り威儀が欠けるところがなく、淨らかなことは宝珠のようで、
 仏の道を求める様も見て、また仏子が忍耐の心にとどまり、増上慢な人が罵り打てば、すべてこらえて、仏の道

を求める様もみて、菩薩が嘲りと笑いと愚かな眷属を離れ、賢い人を近くに、一心に乱れを除き（乱は乱れていることである。）山の林を想い、億千万世を仏の道を求める様も見て、菩薩が善い食べ物と百種の薬材で仏と僧のそのもとに布施をして、名のある良い衣が価が千万あり、価がない衣で（とても貴重で価がないのである。）仏と僧のそのもとに布施し、千万の種類の梅檀香の宝の家と貴重な寝具で仏と僧のそのもとに布施し、清らかな園に花と果実とが盛られ、流れる泉と沐浴する池で、仏と僧のそのもとに布施して、このように種々微妙なものを布施するのに喜びも嫌がりも感じず、無上の道を求める様も見て、菩薩が寂滅した法を説き、種々に無数の衆生を教えるものがあり、菩薩が諸々の法性を見るに、二つの相がなく、虚空のようなものも見て、また、仏子が心にとらわれるものがなく（着はとらわれることである。）このような微妙な智慧で無上の道理を求めるのである。

□다 (人変) 「自進む、先に向って行く。他動詞は나오다。三五章い。고마[名]妾、腰元。□리다[他]棄てる。五四章い。갓[다]他[他]剃る。입다[他]着る。옷[名]服。□오□[副]独り。三五章あ。겨르로□[副]静かに。閑静に。외오다[他]誦する。□□□다[他]思う、念ずる。七八章う。여히다[他]別れる、離れる。九一章い。기피[副]深く。닷[다]他[修]める。깊다[形]深い。굳다[形]固い。디디다[他]持つ。□다[自]備わる。□외오다[他]□외+오の形。할[다]他[破る、うち破る。昱[名]鼓。□□□다[形]黙黙とする。수플[名]林。두루[副]ぐるりと。브즈러니[副]きちんと、真剣に。□니다[自]行き来する。잇다[他]欵く。구짓다[動]相手がまわらず罵る。□다[自]忍ぶ、こらえる。노□[名]戯れ。우□[名]笑い。어리다[形]愚かだ。갓가□[副]近く。덜다[他]除く、減ずる。어즈럽다[形]乱れている、散っている。외[名]山。차반[名]食べ物、料理。은數[百。빈[名]価。□다[形]値が高い。하[副]あまりに、多く。니[名]寝具、ふとん。東山[名]庭、里山。□[名]泉。것[名]もの。슬[副]副厭に、悲しく。브리□□다[自]執着する、とらわれる。

文殊師利 又有菩薩 佛滅度後 供養舍利 又見佛子 造諸塔廟 無數恒沙 嚴飾國界 寶塔高妙 五千由旬
縱廣正等 二千由旬 一一塔廟 各千幢幡 珠交露幔 寶鈴和鳴 諸天龍神 人及非人 香華伎樂 常以供養

文殊師利여 □ 菩薩이 부터 滅度□신 後에 舍利 供養□□□리도 이시며 □ 佛子— 無數恒沙塔
 □ 지□ 나라□ □미니 寶塔 노□ 五千由旬이오 南北과 東西와 正히 □□야 二千由旬이오 塔마
 다 各各 즈은 幢幡이며 구슬 서□ 帳이며 보□옛 바□리 溫和히 울며 天 龍 鬼神□과 사□과
 사□ 아닌 것과 香華伎樂□로 □네 供養□□□ 야□ 다 뵈□다
 文殊師利よ。また菩薩が仏の滅度したもうた後に、舍利を供養したてまつるものもあるし、また仏子が無数恒
 沙の塔をたて、国を飾り、宝塔の高さが五千由旬で、南北と東西とが正に同じく二千由旬で、塔ごとにそれぞ
 れの幢幡、珠を散りばめた帳、宝の鈴が和かに鳴り、天、龍、鬼神たちと人と人でないものが香華伎樂で常に
 供養したてまつる様がすべて見える。

□다 (人變) 「他」造る。노□[名]高さ。즈은[數]千。섯□다[他]交ぜる、散りばめる。바□[名]鈴。

文殊師利 諸佛子等 爲供舍利 嚴飾塔廟 國界自然 殊特妙好 如天樹王 其華開敷 佛放一光 我及衆會
 見此國界 種種殊妙 諸佛神力 智慧希有 放一淨光 照無量國 我等見此 得未曾有 佛子文殊 願決衆疑
 文殊師利여 佛子□히 舍利 供養 위□야 塔□ 식시기 □미니 나라히 自然히 特別히 도하 하□
 樹王이 고지 픈 □□니 (하□ 樹王□ 忉利天 園生樹—니 곳 □ 저기 하□히 自然히 식시기
 □며 도□니라) 부테 □ 光明 퍼사매 내며 한 모□ 사□미 더 나라햇 種種奇妙□ 것과 諸佛入
 神力을 보□□ 네 업던 이□ 얻□□니 佛子 文殊야 모□ 疑心□ 決□고라

文殊師利よ。仏子たちが舍利を供養するため、塔を嚴かに飾り、国が自ずととりわけ善く、天の樹王が花咲く
 ようであり、(天の樹王は忉利天の園生樹であり、花が咲くとき、天が自然に嚴かに飾られ善いのである。) 仏が
 一つの光明を放つに私や多くの集った人が、彼の国にある種種奇妙なものと諸々の仏の神力を見たてまつり、か
 つて無かったことを得たてまつるので、仏子文殊よ、あらゆる疑念を解決してくれたまえ。

프다[直] (花が) 開く。고라[終結] 親しみをこめた柔らかな命令。ゝすることを願う。

四衆欣仰 瞻仁及我

四衆이 올워러 仁과 날와 보□니 (仁□ 우희 仁者—라 호미 □ 가지니 文殊를 □□시니라)
 四衆が仰ぎ、君と私とを見ている。(仁は上の仁者であるということと同じで、文殊を申し上げたまうのであ
 る。)

을월□動仰ぐ。仁代_二きみ。

世尊何故 放斯光明

世尊이 언던 전□로 이런 光明□ 퍼시□뇨

世尊がどのような訳でこのような光明を放ちたまうか。

佛子時答 決疑令喜

佛子— 이제 對答□야 疑心□ 決□야 기□고 □고라

仏子がいま答えて疑念を解き喜ばせてくれたまえ。

何所饒益 演斯光明

□승 饒益□로 이런 光明을 퍼거시뇨

何の饒益でこんな光明を放たれたもうたか。

□_二疑_一何の。連体形。

佛坐道場 所得妙法 爲欲說此

부데 道場애 안□샤 得□샤 妙法을 닐오려 □시□가

仏が道場に坐りたまいて、得たもうた妙法を説こうとされたまうのか。

爲當授記

授記□ 호려 □시□가

弟子に成仏すると予言したまうか。

示諸佛土 衆寶嚴淨 及見諸佛 此非小緣 文殊當知

한 佛士애 衆賣 一 식시기 조호 □ 뵈시며 (佛士 □ 부텃 □ 히라) □ 諸佛을 보 □ 게 □ 샤미 이
 저고만 因緣이 아니시니 文殊야 아라라
 多くの仏土でいろいろな宝がおごそかに淨きことを見せたまい(仏土は仏の地である。)また諸々の仏を見た
 てまつるようになされたまうことが、これ小さな因縁ではないので、文殊や、知れ。
 저고만連小सान아 라語尾命令の終結語尾。しる。

四衆龍神 瞻察仁者

四衆이며 龍과 鬼神과 仁者 □ 보 □ 니

四衆や龍と神とが君を見ている。

爲說何等

□ 스 이 □ 뵈오러 □ 시 □ 호

何事を説こうとなされるか。

□ 스連何の 고러 □ 다 しようとする。

爾時文殊師利語彌勒菩薩摩訶薩及諸大士 善男子等 如我惟忖 今佛世尊 欲說大法 雨大法雨 吹大法螺
 擊大法鼓 演大法義

그 □ 文殊師利 彌勒菩薩摩訶薩와 諸大士 善男子等 □ 러 니 □ 샤 □ 내 헤여호니 이제 世尊이

큰 法을 니르시며 큰 法雨를 비흐시며 큰 法螺 □ 부르시며 큰 法鼓 □ 티시며 큰 法義 □ 퍼러

□ 시 □ 다 (雨)는 비오 螺 □ 골와래오 鼓 □ 부피오 義 □ 디니 비 □ 마 □ 로 골오 짓고

螺 □ 소리로 다 □ 고 뵈든 한 사 □ 출令 □ 고 義 □ 맛 □ 야 □ 조차 여러 내 □ 니 부

텃 法을 가 □ 버 니르니라)

その時、文殊師利、彌勒菩薩摩訶薩と諸大士、善男子等に説かれるに、私がおしはかるに、今、世尊が大法を
 説きたまい、大法雨を降らせ、大法螺を吹かれ、大法鼓をうたれ、大法義を述べられようとなされたまう。(雨

は雨で、螺はホラ貝で、鼓は大鼓で、義は意味である。雨は一つの長雨で均しくうるおし、螺は一つの音で、広くゆき渡り、太鼓は多くの人に命令を出し、義は宜しきに従い開いてゆく。仏の法をたとえて言うのである。

헤어 □ 다動^동惟^유い^이付^하る。부르다 □ 他吹く。골와래 □ 名ホラ貝。골오 □ 副等しく、均等に。짓다 □ 他うるおす。□ 다動^동奥^오深^심く行^행きわたる。부플다 □ 巨膨らむ。가□비□다 □ 動たとえる。

諸善男子 我於過去諸佛曾見此瑞 放斯光已即說大法

善男子 □ 하 내 다나건 諸佛 □ 이런祥瑞 □ 보□□니 이런 光明을 퍼시면 큰 法을 니르시더니

善男子たちよ。過ぎ去った諸々の仏に、このような祥瑞を見たてまつるに、このような光明を放ちたまうと、大きな法を説きたもうた。

하 □ 助呼格の敬体。一二五章あ。면 □ 接続ならば。Aを仮定すると、意志とは無関係にBが生ずることを表わす。是故當知

이럴□ 아노리

これゆえに知っている。

노□ 終結相手に宣言している語尾。

今佛現光亦復如是 欲令衆生咸得聞知一切世間難信之法 故現斯瑞

이제 부테 光明 보삼도 □ 이 □□시니 衆生□로 一切世間잇 信티 어려□ 法을 다 ㄷ□□

알에 호리라 □샤 이런祥瑞 □ 보시□니라

今、仏が光明を見せたもうことも、またこれと同じであられ、衆生に一切世間において信じ難い法をことごとく聞き知らしめようとなしたまい、このような祥瑞を見せたもうのである。

디 어렵□ しがたい、するのが厭だ。어렵다 (口変) 「形」(客観的には) 難しい、(主観的には) 嫌だ。

諸善男子 如過去無量無邊不可思議阿僧祇劫 爾時有佛 號日月燈明如來應供正遍知行足善逝世間解無上士

調御丈夫天人師佛世尊

善男子□하 □나건 無量無邊不可思議 阿僧祇劫時節에 부데 거샤□ 號□ 日月燈明 如来 應供 正
 遍知 明行足 善逝 世間解 無上士 調御丈夫 天人師 佛 世尊 이리시니 (日月燈明은 智慧 □□샤
 미 日月燈이 □□실 씨니 그 부렛 일후미시니라)

善男子たちよ。過去の無量無邊不可思議の阿僧祇劫の時に仏がおられて号を日月燈明、如来、応供、正遍知、
 明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊であられた。(日月燈明は智慧に明るくあられる
 ことが、日、月、燈明と同じであられるので、その仏の名であらせられるのである。)

演說正法 初善中善後善

正法을 불어 니□샤□ 初善 中善 後善이리시니 (初善 中善 後善은 三乘法을 니르니 다 機□
 應□야 道理에 마조미 온 도□니 업슬□ 善이라 □니라 機□ 위어나논 고디라 應은 마초□
 씨라)

正法を演説したまうに初善、中善、後善であられた。(初善、中善、後善は三乘法を言われ、みな機に應じて、
 道理にかなうことが、善くないことが無いので、善というのである。機は動き生じるところである。応はあわせ
 ることである。)

맞다形に適っている。마초副あわせて、照しあわせて。

其義深遠 其語巧妙 純一無雜 具足清白梵行之相

그 □□디 깊고 멀며 그 말□□미 工巧코 微妙□야 오□로 첫근 거시 업서 清白□고 梵行잇 相
 이 □□드시니

その義が深遠で、そのお言葉は巧みで、微妙で全く雜り気がなく、清白で梵行の相が備いたもうた。

오□로副完全に、純一で。첫□다動混じる。

爲求聲聞者 說應四諦法 度生老病死究竟涅槃 爲求辟支佛者 說應十二因緣法 爲諸菩薩說應六波羅蜜 令

得阿耨多羅三藐三菩提成一切種智

聲聞 求□ 卍□ 위□산 四諦法 니□샤 生老病死□ 벗기샤 究竟涅槃코 □시고 辟支佛 求□ 卍□ 위□산 열두 因縁法을 니르시고 菩薩□ 위□산 여섯 波羅蜜□ 니□샤 阿耨多羅三藐三菩提□ 得□야 一切種種智慧□ 일우게 □더시니 (一切種種智慧□ 부테□ □□시니라)

声聞を求める人のためには、四諦の法を説きたまい、生老病死を脱し、究竟涅槃させたまい、辟支仏を求める人のためには、十二因縁の法を説かれ、菩薩たちのためには、六波羅蜜を説かれ、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切種種の智慧を成就するようになされた。(一切種種智慧は仏であつてはじめて備わるものである。)

卍□は≡の後で人が濃音化した形。사□. 벗기다[他]脱ぐ、脱す。열두[数]十二。일우다[他]成す。十二章う。
次復有佛 亦名日月燈明 次復有佛 亦名日月燈明

버거 부테 겨샤□ □ 일후미 日月燈明이시고 □ 버거 부테 겨샤□ □ 일후미 日月燈明이러시

니

次いで仏がおられたが、またその名が日月燈明であられ、また次いで仏がおられたが、また名が日月燈明であられた。

벗다[動]次ぐ。

如是二萬佛 皆同一字 號日月燈明 又同一姓 姓頗羅墮

이러히 二萬 부테 다 □ 가짓 字號로 日月燈明이시며 □ □ 가짓 姓이샤 姓이 頗羅墮—러시

니

このように二万の仏がみな同じ字号で、日月燈明であられ、姓が頗羅墮であられた。

이러히[副]このように。副詞への転成については一〇七章あ。

彌勒當知

彌勒아 아라라 弥勒や、知れ。

初佛後佛皆同一字 名日月燈明 十號具足 所可說法初中後善

첫 부더 後入 부테 다 □ 가짓 字로 일후미 日月燈明이시고 열號 一 □□시고 니르시는 法이
初中後善이러시니

初めの仏、後の後がみな同じ字で、名が日月燈明であられ、十号が備つておられ、説きたまう法が、初、中、
後が善であられた。

열數干

其最後佛未出家時 有八王子 一名有意 二名善意 三名 無量意 四名寶意 五名増意 六名除疑意 七名
嚮意 八名法意

□ 乃終入 부테 出家 아니 □야 거□ 저기 여듬 王子□ 두겨샤□ □ 일후은 有意오 들찰

이후은 善意오 세찰 일후은 無量意오 네찰 일후은 寶意오 다□찰 일후은 増意오 여섯찰 일후은

除疑意오 님급찰 일후은 嚮意오 여덟찰 일후은 法意러시니

一番後の仏が出家なされずにいたとき、八人の王子を持たれ、はじめの名は有意で、二番目の名は善意で、三
番目の名は無量意で、四番目の名は宝意で、五番目の名は増意で、六番目の名は除疑意で、七番目の名は嚮意で、
八番目の名は法意であられた。

□連最も。乃終(名後、しまい。두겨시다(他(子供を)持つ、おくの敬語。

是八王子 威徳自在 各領四天下

이 여덟 王子 一 威徳이 自在□샤 各各 네 天下□ 거느릿더시니

この八人の王子が威徳自ずとあり、それぞれ四大洲を治めておられた。

거느리다(他)領する。治める。거느리+어+잇더시니。四天下(名)四大洲。

是諸王子 聞父出家得阿耨多羅三藐三菩提 悉捨王位 亦隨出家 發大乘意 常修梵行 皆爲法師 已於千萬

佛所 殖諸善本

이 王子□히 아바니미 出家□샤 阿耨多羅三藐三菩提□ 得□시다 드르시고 다 王位□ □리시고

조차 出家□야 大乘잇 □틀 發□야 □네 조□ □역 □다 □다 法師— □외샤 □마 千萬 부터□
 들잇 □트 根源을 시므시니라 (法師□ 法 스스□다)

この王子たちが、父が出家なされ、阿耨多羅三藐三菩提を得られたとお聞きになり、みな王位を捨てられ、追つて出家し、大乘の志を発し、常に淨い行を修めて、みな法師になられ、既に千万の仏のもとで諸々の善い根源をお植えになられたのである。(法師は法の師である。)

是時日月燈明佛 說大乘經 名無量義教菩薩法佛所護念

그 □ □ 日月燈明佛이 (日月燈明佛이 여름 王子스 아바니미시니라) 大乘經을 니르시니 일후미 無量義니 菩薩 □□치시는 法이라 부터 護念하시는 배라

その時、日月燈明仏が(日月燈明仏が八人の王子のお父様であらせられたのである。)大乘經を説きたまい、名が無量義であり、菩薩を教えたまう法である。仏の護り念じたまう所である。

說是經已 即於大衆中結跏趺坐 入於無量義處三昧 身心不動 是時天雨曼陀羅華 摩訶曼陀羅華 曼殊沙華

摩訶曼殊沙華 而散佛上及諸大衆 普佛世界六種震動

이 經을 니르시고 즉자히 大衆中에서 結加趺坐□샤 無量義處三昧에 드르샤 몸과 □□과 응즈디
 아니 □야 거시거늘 그 지고 하□해서 曼陀羅華와 摩訶曼陀羅華와 曼殊沙華와 摩訶曼殊沙華□
 부터 우과 大衆□히 그□ 비흐며 너른 부터 世界 여섯 가지로 震動□더니

この經を説きたまいて、すぐに大衆の中で結迦趺坐なされ、無量義処三昧に入りたまひ、身と心とが動かずにおりたまうと、その時、天が曼陀羅華と摩訶曼陀羅華と曼殊沙華と摩訶曼殊沙華を仏の上と大衆たちのもとに降らせ広い仏の世界は六種に震動した。

즉자히副即時、すぐに。

爾時會中比丘比丘尼優婆塞優婆夷 天龍夜叉乾闥婆阿修羅樓羅緊那羅摩□羅伽人非人 及諸小王轉輪聖王等

是諸大衆得未曾有 歡喜合掌一心觀佛

그 □ 會中잇 比丘 比丘尼 優婆塞 優婆夷 天 龍 夜叉 乾闥婆 阿脩羅 迦樓羅 緊那羅 摩訶羅
 伽人 非人과 諸小王과 □ 轉輪聖王과 이 大衆□히 네 업던 이□ 얻□□ 觀喜合掌□야 □ □
 □□로 부더를 보□□더니

その時、會中の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、
 人、非人と諸々の小王とまた轉輪聖王とこの大衆たちがかつて無かつたことを得たてまつり、歡喜合掌し、一心
 に仏を見たてまつっていた。

보□□더니 보+□+아+잇+더+니.

爾時如來放眉間白毫相光 照東方萬八千佛土 靡不周遍 如今所是諸佛土

그 □ 如來眉間白毫相잇 光明을 퍼샤 東方잇 一萬八千佛土□ 비취샤□ 오□날 보□는 佛土—
 □더니

その時、如來眉間白毫相から光明を放たれ、東方にある一萬八千佛土を照らしたまうに、今日の日に見たてま
 つつている仏土と同じであつた。

ㄷㄹㄱ[終結]回想平叙の語尾。

彌勒當知 彌勒아 아라라 弥勒よ。知れ。

爾時會中有二十億菩薩 樂欲聽法

그 □ 會中에 二十億菩薩이 法 들□□□ 즐기더니
 その時、會中で二十億菩薩が法を聞きたてまつることを喜んでいた。

是諸菩薩見此光明普照佛土 得未曾有 欲知此光所爲因緣

이菩薩□히 이 光明이 너비 佛土 비취시는 고□ 보□고 네 업던 이□ 얻□□ 이 光明入 因
 緣을 알우져 □더니

この菩薩たちが、この光明が広く仏土を照らしたまうのを見たてまつり、かつて無かつたことを得たてまつり、

この光明の因縁を知ろうと思った。

【名】こと

時有菩薩 名曰妙光 有八百弟子

□ □ □ □ 菩薩 일후미 妙光이라 호리 八百弟子□ 뒸더니

その時、一人の菩薩、名が妙光という人が八百の弟子を持っていた。

是時日月燈明佛從三昧起 因妙光菩薩說大乘經 名妙法蓮華教菩薩法佛所護念

□ □ □ □ 日月燈明佛이 三昧로셔 니르샤 妙光菩薩□ 因□야 大乘經을 니르시니 일후미 妙法蓮華

一니 菩薩 □□치시는 法이라 부터 護念□시는 배라 (妙法이라 혼 거시 더러□ 거슬 □리고 다

□ □ □ □ 가 微妙□ 이□ 얼논디 아니라 그저 더러□ 거괴셔 微妙□ 法을 나토며 一乘이라 혼

거슨 三乘□ 여히여 □리고 一乘□ 니르논 디 아니라 三乘□ 모도야 一乘에 가□니 이 經이

더러□ 거괴 微妙□ 이□ 나토오미 蓮入 고지 더러□ 므레 이쇼□ 조호미 □고 三乘이 모다

一乘에 가미 蓮入 고지 고□로셔 여음 여루미 □□□ 妙法蓮華經이라 □니라)

その時、日月燈明仏が三昧から起きたまい、妙光菩薩に因り大乘經を説きたまい、名が妙法蓮華であり、菩薩を教える法である。仏の守り念じたまうところである。(妙法というのは汚いものを捨て、他の所に行つて微妙なことを得るのではなく、そのまた汚いその場で微妙な法を表わし、一乗とは、三乗を離れ捨てて、一乗を説くのではなく、三乗を集めて、一乗に行く。この経が汚いその所で微妙なことを表わし、蓮の花が汚い水にあつても清らかであるように、三乗が集つて一乗に行くことが、蓮の花が花から実を結ぶと同じであるので、妙法蓮華經というのである。)

로셔【助】くから、起点を表わす。因□다【動】因る、ちなむ。다□다【形】違う、異なる。나토오【他】表す。여음【名】実。일□他【(実を) 結ぶ。】

六十小劫不起于座 時會聽者亦坐一處 六十小劫身心不動 聽佛所說謂如食頃 是時衆中 無有一人若身若心

而生懈倦

여□ 小劫을 座애 니디 아니 □시니 모다 틀□□리도 □ 고대 안자 여□ 小劫을 몸과 □□
 과 음즈디 아니 □야 부럿 마□ 들□□□□ 밥 머물 □□만 너겨 □나토 잇븐 □ 내리 업더라
 六十の小劫を座から起きることなく、集つて聞きたてまつる人も一ヶ所に坐つて六十の小劫を身と心とが動く
 ことなく、仏の言葉を聞きたてまつるが、食事をする間ほどに思い、一つもうんざりした意を出すものがないな
 かった。

□□(名)中間、あいだ。四章い。잇븐[正形]つかれた。

日月燈明佛 於六十小劫說是經已 即於梵魔沙門婆羅門及天人阿修羅衆中 而宣此言 如來於今日中夜當入無

餘涅槃

日月燈明佛이 여□ 小劫을 이 經 니르시고 즈자히 모□ 中에 니□샤□ 如來 오□ □ 中에

無餘涅槃애 들리라 (無餘涅槃□ 나□ 것 업스 涅槃이라)

日月燈明佛が六十の小劫をこの経を説きたまいて、すぐに集つた中でのべたまうに、如來は今日の夜中に、無
 余涅槃に入られるであろう。(無余涅槃は残つたものがない涅槃である。)

時有菩薩 名曰德藏

그 □ □ □ 菩薩 일후미 德藏이라니

その時一人の菩薩の名が德藏であった。

日月燈明佛 即授其記 告諸比丘 是德藏菩薩 次當作佛 號曰淨身多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀

日月燈明佛이 授記□야 比丘□려 니□샤□ 이 德藏菩薩이 버거 부테 □외야 號□ 淨身多陀阿伽

度阿羅訶三藐三佛陀이라 □리라 (多陀阿伽度□ 如來라 혼 마리라)

日月燈明佛が授記して、比丘に説きたまうに、この德藏菩薩が次に仏となり、号を淨身多陀阿伽度阿羅訶三藐
 三佛陀というであろう。(多陀阿伽度は如來であるという語である。)

佛授記已 便於中夜入無餘涅槃

부테 授記 다 □시고 곧 □ 중에 無餘涅槃애 드르시니라

仏が授記をすべてなしたまい、すぐに夜中に無餘涅槃に入りたもうたのである。

佛滅度後 妙光菩薩 持妙法蓮華經 滿八十小劫爲人演說

부테 滅度□신 後애 妙光菩薩이 妙法蓮華經을 가저 八十小劫을 사□ 위□야 불어니르디니

仏が滅度なされた後に妙光菩薩が妙法蓮華經を持つて八十小劫を人のために演説した。

日月燈明佛八子 皆師妙光 妙光教化 令其堅固阿耨多羅三藐三菩提 是諸王子 供養無量百千萬億佛已 皆成佛道 其最後成佛者 名曰燃燈

日月燈明佛八 王子□히 無量百千萬億 부터를 供養□□고 다 부테 □외시니 □ 後애 成佛□신 일후미 燃燈이러시다

日月燈明佛八 王子□히 無量百千萬億 부터를 供養□□고 다 부테 □외시니 □ 後애 成佛□신 일후미 燃燈이러시다

日月燈明佛八の息子がみな妙光を師としたところ、妙光が教え阿耨多羅三藐三菩提にかたまりさせたま

い、この王子たちが無量百千萬億の仏を供養したてまつり、みな仏となりたまい、最も後に成仏された名が燃燈であられた。

삼다[他縁を結ぶ。곧다[自固まる。곧히다[他固める。三十章え

八百弟子中有一人 號曰求名

八百弟子八 中애 (八百弟子□ 妙光菩薩八 弟子一라) □나히 일후미 求名이러니 (求名은 일후를 求□

씨니 實 업시 일후를 求□ 씨라)

八百弟子の中に(八百弟子は妙光菩薩の弟子である。)一人の名が求名であった。(求名は名を求めることで、

実なく名だけ求めることである。)

貪著利養 雖復讀誦衆經而不利 多所忘失 故號求名

貪著利養 雖復讀誦衆經而不利 多所忘失 故號求名

貪著利養 雖復讀誦衆經而不利 多所忘失 故號求名

利養□ 貪□아 한 經을 닐거도 通達티 問□아 해 니즐□ 일후을 求名이라 □더니 (利養□ 豆
 히 칠 씨니 □□란 本別 아니코 제 몸□ 豆히 추미라 小乘엇 사□미 제 몸 닷□ □고
 □ 濟度 問 □□ 小乘□ 利養□□다 □□니라)

利養を貪り、多くの經を読んでも深く通じることが出来ず、沢山忘れるので名を求名といった。(利養はよく
 養うことで、他人は理解せずに、自分の身だけよく養うことである。小乗において人が自分の身を修めるだけし
 て、他人を濟度できないので小乗を利養すると言うのである。)

해副沢山、いっぱい。닛다[他]忘れる。치다[他]育てる。본별□다[動]理解する、考える。

是人亦以種諸善根因緣故 得值無量百千萬億諸佛 供養恭敬尊重讚嘆

이 사□도 □ 善根因緣을 심곤 전□로 無量百千萬億佛을 맛나□□ 供養恭敬□며 尊重讚嘆□□
 니라

この人もまた善根因縁を植えたために無量百千万億諸仏と会いたてまつり、供養恭敬し尊重讚嘆したてまつつたのである。

심□다[他]植える、種をまく。

彌勒當知 彌勒아 아라라 彌勒よ、知れ。

爾時妙光菩薩 豈異人乎 我身是也 求名菩薩汝身是也

妙光菩薩□ 다□ 사□미리며 내 모미 고토 求名菩薩□ 그릿 모미 그라

妙光菩薩は他の人であろうか。私の身がそれであり、求名菩薩はそなたの身がそれである。

今見此瑞與本無異 是故惟忖 今日如來當說大乘經

오□ 날 이祥瑞□ 보□□ □ 아래와 다□다 아니 □시니 이럴□ 헤여호니 오□ 날 如來
 □다□ 大乘經을 니르시리니

今日、この吉兆を見たてまつった所はもとと異なることなく、これ故に思い量るに今日、如來がきつと大乘經

を説きたまうであらう。

아래[名]もと、以前。헤어□다動思い量る。

名妙蓮華教菩薩法佛所護念

일후미 妙法蓮華一니 菩薩 □□치시논 法이라 부터 護念□시논 배라 (이 □자□ 序品이니 品은

나호아 제어곰 낼 씨라)

名が妙法蓮華で、菩薩を教えたまう法である。仏の護り念じたまうところである。(これまでは序品で、品は分けてそれぞれに出すことである。)

『釋譜詳節第十三』は、ここから「序品」の抄訳から「方便品」の編訳に移る。「序品」部のこの後にある「爾時文殊師利 於大衆中 欲重宣此義 而説偈言」とそれ以下の文殊師利の偈は全て省略され訳されていない。

結

本論文は『釋譜詳節第十三』の第三十七張二行目までが『法華經』「序品」の抄訳であることをまず明らかにした。それを示すためにそれに相当する訳文の前に原文をつけ、その後には和訳をつけた。

次に『法華經』の文の切れ目に注目して、『釋譜詳節第十三』の訳文もその切れ目に従って切られ、訳文が作られていると予測し、訳文の文章を分節した。この切れ目は本文に示した通りである。その結果、これまで冗長な文章と解されていた訳文が、比較的短い文の集合と見ることができ、原文同様の明快な文章と解せた。

さらに、文の切れ目が訳文でも形態的に表示されていることを明らかにした。それらの形態は、時をあらわす接辞+ㄴ, 이러ㄴ, 連体形語尾+이ㄴなどである。これら語尾の後には□ □ (その時) や人に対する呼びかけがあらわれ、文の始りを示している。大体において文の切れ目は場面のかわる所であった。

文末の□は、その後に来る라や□다などを省略したものと考えられる。省略により待遇を低めたものであらう。

これは十九世紀後の会話体で敬意を表わずに使われた오이다の이다が省れ、오となり待偶が低くなるのと同様の現象であろう。

語の解釈は現代語からの類推をできるだけ避け、漢字と訳語を対応させ、漢字の意味を採用した。それは注で示している。この結果、これまで現代語への対訳では広義となり、訳文が明確でなくなることがあるが、それを防げた。

『釋譜詳節第十三』の残りの部分は「方便品」の編訳である。これについても原稿は作成して有るが、紙数の制限で「序品」に限定することにした。

注

- 一 安秉禧(一九七九)一一二頁。千柄植(一九八五)。
- 二 前問(一九二四)が典型的である。
- 三 김영배(一九九一)の訳注。『역주 석보상절』13・19』所収。
- 四 意図法については李崇寧(一九八一)に簡潔な解説がある。他の解釈もあるが、本論文はこれに従っている。

参考文献

- 小倉進平 (一九四〇) 增訂朝鮮語學史 刀江書店 東京
 織田得能 (一九五四・再刊) 織田佛教大辭典 大藏出版 東京
 坂本幸男・岩本裕 (一九九二) 法華經(上) 岩波文庫 岩波書店 東京
 志部昭平 (一九九〇) 諺解三綱行實圖研究 汲古書院 東京
 前間恭作 (一九〇九) 韓語通 丸善 東京
 — (一九二四) 龍歌故語箋 東洋文庫論叢 東京
 김영배 (一九九一) 연구서보상절제 13·19 세종대왕기념사업회 서울
 김영환 (二〇一四) 조선말려사연구론민집 과학백과사전출판사 7146032 平壤
 영종출 (一九八〇) 조선어 문법사 김일성종합대학출판사 79-110975 平壤
 同右 (一九九二) 조선말려사문법 김일성종합대학출판사 91-94 平壤
 方鐘鉉 (一九四六?) 古語材料辭典 서울大學校 師範大學 國文學會 油印本 서울
 安秉禧 (一九七九) 中世語의 한글資料에 대한 綜合的인 考察、奎章閣3、서울大學校圖書館 서울
 安秉禧・李珧鎬 (一九九〇) 中世國語文法論 學研社 서울
 劉昌惇 (一九六四) 李朝語辭典 延世大學校出版部 서울
 李崇寧 (一九八一) 中世國語文法(改訂增補版) 乙酉文化社 서울
 千柄植 (一九八五) 釋譜詳節第三註解 亞細亞文化社 서울
 허웅 (一九八三) 우리 옛말본 삼문화사 서울